

## 機関・団体を対象に実施したヒアリング調査結果

- ◆ 分野の異なる 9 つの機関・団体を対象に令和 6 年 1 月～2 月にかけてヒアリングを行いました。
- ◆ 本資料では、「子どもにみられる課題等」、「保護者にみられる課題等」、「子どもや保護者に対するかかわり方として重要なこと」、「今後市の施策等に関して重要と考えられること、課題等」の 4 つの観点から、ヒアリングで意見聴取できた内容を整理しました。

### (1) ヒアリングを実施した機関・団体等がかかわりを持つ子どもにみられる課題等

#### ① 学習支援の必要性

学習に遅れ等がみられ、より丁寧な学習支援が必要な子どもがいます。特に不登校の子どもに対する学習支援が課題になっています。

- 学習支援において、紙を左手で押さえる、鉛筆の角度、持ち方などが身につけていないから字を書くのが遅いといったところからスタートするケースも多くみられる。
- 課題として、不登校の子は学力が低く、経済困窮の家庭の子は高校の選択が限られてしまう。本当に自分が行きたい高校へ行けない。
- 不登校の場合、学力の遅れについて子ども自身も不安を抱いている。サポートルームや適応指導教室は自習形式であるが、元々そういう子は勉強の仕方もわからず、自分の理解度がどの段階かもわからないので、結局こういった場所にも行けなくなってしまう。経済的に困っている家庭は塾代も出せない。公的支援はあるが足りていない。

#### ② 障害に関する支援の必要性

発達面に課題を抱える子どもに対しては、専門的な医療・療育の支援が必要となっています。また、障害がある子どもと同居するきょうだいの方に課題が生じることもあります。

- 発達障害の子どもたちは通級教室に通っているが専門的な療育の積み重ねが必要と感じる。
- 障害がある子どもと同居するきょうだいの方に、普通のお子さんができるような経験ができないという課題が生じることが多い。
- 発達面に課題を抱える児童への支援として、教育センターや病院への同行支援も必要である。医療等につながるができない、つながろうとしないケースもある。

### ③登園・登校支援の必要性

保護者の養育に課題がある場合に、子どもの登園・登校を支援することも必要になります。

- 被虐待児への支援として、安心できる環境の提供、安定した通学の保障が必要である。登校することが習慣づいていない子どももあり、朝決まった時間にしっかり登校できるということを見守る、ということがまず重要である。
- 登校渋りや五月雨登校の場合、小学校では遅刻や早退の際に保護者の送迎が必要。ただし、親に疾患があると、送迎はもちろん、支度をして送り出すことが困難。子どもは学校に行きたいのに付き添える人がいないために行けない状況もある。登校支援を必要としている家庭も多い。ファミサポもあるが、有料になってしまうため経済的な理由で活用できない家庭もある。

### ④外国籍・外国にルーツがある子どもの課題

外国籍・外国にルーツがある子どもの場合には、言語習得の面・学習面の課題だけでなく、保護者との関係に課題が生じることがあります。

- 外国籍の方が市内でも増えてきており、言語の問題があることや、お子さんの勉強を見てあげられない、フォローできないという課題も多くなってきている。
- 親子の関係が良好ではないときもあるので、親子それぞれへのアプローチが大事。例えば、子どもの方が日本語が上手になると、社会的コミュニケーションの能力において親と立場が逆転することがあるが、その場合には、親とはメール、子どもとは SNS など、親子で別々に対応を行うことも必要になる。

### ⑤近年のコロナの影響等

コロナの影響により、子どもがネットに触れる時間やゲームをする時間が長くなった可能性があります。

- コロナ禍の一斉休校の期間は、子ども自身が長期間ネットに触れられた期間であったように思う。また、学校に登校できても、イベントの減少や黙食、マスクの着用等により、直接的なコミュニケーションを避けねばならない状況があった。加えて子ども自身がスマホやタブレットを持つことで、ネットやゲーム等にのめりこみやすい環境が以前よりも増加していると感じる。

## (2)ヒアリングを実施した機関・団体等がかかわりを持つ保護者にみられる課題等

### ①保護者の精神疾患、障害等の養育の困難

保護者が精神疾患や発達障害等の課題を抱えており、養育が困難になっている場合があります。

- 保護者が精神疾患を抱えており、子育てに苦勞をしている方がいる。
- お母さんが精神的に落ち込まれている、波がある方、というのが肌感覚で増えている。
- 保護者の方が精神的な疾患や発達障害等を抱えていることも多い。また、そのような場合に保護者に対応する支援機関がないことも課題としてある。

### ②外国籍・外国にルーツがある保護者の課題

外国籍・外国にルーツがある保護者の場合には、言葉の問題や文化の違いによって課題を抱えることが多くなっています。近年、国籍がより多様になっており、通訳の対応が課題になることもあります。

- 日本はクラス便りや学校便り等の学校からの書類が多い。連絡が細かい。1年生の中で学期によって持ち物が変わる。もともとそういう文化がないのでついていけない外国の方もいる。
- 大学に留学に来ていて妊娠出産を迎える方もいる。言葉の壁、困窮な状況に陥ったといったところで相談に繋がってくるケースもある。
- 外国にルーツを持つ方については、言葉の問題もあるが育ってきた文化が異なる中での難しさもある。国籍も多様になっており、通訳の対応などが課題になることもある。
- オンライン化、デジタル化が増えて、それがますます壁になっている人がいる。日本語であってもシンプルでわかりやすい資料が必要。またコールセンターがナビダイヤルを使用しており、その案内メッセージが日本語のため、電話が繋がらないと不安を持つ方も多い。

### ③複合的な課題、課題の多様化

保護者（家庭）における課題は、単一の内容でなく、複数の内容が重なっていることがあります。また、近年課題がより多様化している可能性があります。

- 保護者本人が発達障害の診断があり、生活に困窮があり、子どもも発達検査を受けているケースがある。
- 1人ずつ課題が異なっていて、一概にこれというのは難しい。多様化しているのはとても感じる。10人いたら10人課題が違う。
- 児童の家庭環境について、経済的困窮、ネグレクト、両親の不仲、親の疾患・知的発達などが原因で養育困難になっているケースが多い。また、それらの要因から子どもが不安定になり不登校へつながっているケースも多い。

#### ④近年のコロナの影響等

コロナの影響で、家庭内で虐待やDV等の課題が起きることが多くなった可能性があります。また、地域とのつながりの希薄化が進んだ可能性があります。

- 家の中で家事と育児をして親に余裕がなく、子どもをたたいてしまうというケースがコロナで増えた。コロナにより、子育て世代の孤立化や地域のつながりの希薄化がより強くなっていると感じる。
- コロナで夫婦げんかが増えた、ということがある。日本の家は狭いのでパーソナルスペースが必要。些細なことで喧嘩になり、それを子どもが見ている。
- 家で居る時間が増えたことで、DV 自体も増えたと思う。
- コロナの影響で給料が減額されたり、仕事がうまくまわらなくなったりした家庭がいくつかある。親の仕事の不安定さは家庭環境に大幅な影響を与える。

### (3)子どもや保護者に対するかかわり方として重要なこと

#### ①アウトリーチによる支援

対象となる方が支援等を求めるのを待っているのではなく、アウトリーチにより課題を把握し、支援を行っていくようにすることが重要です。

- 相談窓口に行って相談できる人ばかりではないため、アウトリーチによる関わりが多く関係機関ができるようになる  
とよい。
- 申請主義なので本人が申請に行かないと支援に繋がらない。療育的などころのグレーなケースが多いので、専門的にアドバイスできるようなところと連携があると良い。
- アウトリーチで動ける支援を重層化していくことが必要。福祉職だけでなく、心理職や学習支援、メンタルフレンドなどがあればより多くのニーズに対応できる。
- 待っていても支援を求めてこないケースは、関係機関で相談をして関わる切り口を検討して、支援者側から接近していくことが必要となると思うので、行政機関においてアウトリーチで動ける部署が増えるとういと思う。

## ②受容する形・寄り添う形での対応、信頼関係の形成

対象となる方の話をよく聞き、受け入れる姿勢を持って接することが重要です。信頼関係を築き、継続的な関係を形成することが重要です。

- 会話の中で気づいたことがあった場合には、話してもらえように関係性を築くようにしている。信頼関係を築いて、続けてきてもらう中で、だんだん相談等をしてくれるようになる。「聞き役」に徹するようしており、よき理解者でいられるように留意している。
- 毎回、話を聞くこと。道で会った時に必ず声をかける。普通の話をする。普通に話をする大人、というところを意識するようにしている。孤立化させない、1人じゃない、というメッセージを送り続ける。あなたのことを気にしている、あなたの名前も知っている、あなたのことを気にしている大人があなたの傍にいる、というメッセージを大人が送り続ける。
- 関わるスタッフに対して、中高生の話す内容に良い・悪い等のジャッジしないということは伝えている。何か聞いてアドバイスをするとか、自分の意見を言うわけではなくて、聞いて、しっかり共感してあげるっていうところをしっかりと大事にするように伝えている。
- いろいろな経験をしている子どもがいるので、受容的に構えて、否定しないことが大事である。いろいろなアイデアや発想を出してくれた時に、それを大事にしてあげるのが大人の役目なのではないかと思っている。
- まずはこちらから give(話を聞く、フード提供、役に立つ情報提供、教える、褒めるなど)を継続して、関係性を築くことが大切である。メリットをまず伝えることが大切である。相手に合ったコミュニケーションを使う(電話、翻訳アプリ、SNS(LINE、Instagram、Facebook 等))ことも大切である。

## ③身近な人による気づき

子どもにとって身近な存在である人が、子どもの変化やサインに気づき、その気づきをもとに支援等につなげていくことが重要です。

- 大人の気づきが大切。特に学校の担任の先生。毎日顔を合わせているのは担任の先生。そこで気付いていただけるのが一番いいのだろうと思う。
- 周囲が支援的な声掛けをする。(近所、学校、保育園など子どもと関わる機関の優しい声かけ)。子どもがいろんなサインを出してきたときに、学校の先生、子どもに携わる仕事をしている方がどうしたのとかと、話を聞くスタンスでいてもらえるとそこから支援に繋がってくるのではないかと考える。
- 小学生、中学生の場合、毎日登校する日常の中で先生方の気づきが出発点になる場合が多い。学校での対応の中で課題が明確化し、随時対応されている。しかし、家庭内の課題まで子どもが話をしないこともあるので、学校から教育相談、子育て相談、スクールソーシャルワーカーに連絡をもらうことが重要である。

#### ④連携による支援

子ども・保護者それぞれの様々な課題に対応するため、関係機関において連携して対応することが重要です。

- 様々な相談が来る中で関係機関との連携が大事になってくる。関係機関へつなぎ引き継ぐ場合もあるが、一緒に動きながらつないでいくケースもあるので一緒に動くというスタンスで関係機関が連携できるとよい。
- 保護者支援と子ども支援の両方が必要。関係機関が複数関わっている場合には役割分担をしている。要保護対策協議会の会議で役割分担している。

#### (4) 今後市の施策等に関して重要と考えられること、課題等

##### ①相談窓口、対応窓口等の充実

オンライン相談や 24 時間体制の相談対応など、相談対応の充実が求められています。外国籍・外国にルーツがある方への言語対応や、不登校など特定の課題に対応する窓口の充実等が重要です。

- 相談窓口支援について、対面だけでなく LINE など気軽に相談できるシステムを構築する。
- 様々な相談機関の QR コードや 24 時間体制は有効だと考える。困りごとが起きるのは週末とか夜。そこをカバーできるとよい。
- 相談支援の充実。相談内容の多様化に対応できるようにする。
- 進路先や通常学級での配慮を要する子どもの困っていることをどのように担任に伝えれば良いかなど保護者のちょっとした困りごとを話す場が少ない。(スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーは予約がいっぱい)
- SOS が出せる相談窓口(SNS で匿名でも相談が可能、気軽に相談できる)の開設。
- 行政窓口において、多言語対応する必要はないと思うが、やさしい日本語で話すスキルは必須なのではないかと思う。
- 不登校に関する情報が一本化されると良い。基本的には、学校に相談することが多い。そうすると学校に来ることを目標にすることが多くなるが、それが子どもとマッチしないと、行けない状況が続いてしまう。

## ②経済的支援の充実

様々な形での子育て・教育にかかる費用の軽減など、経済的支援の充実が求められています。

- 一時的な支援金ではなく、息の長い政策が必要。とにかく子育てにかかるお金を少しでも減らせるように。
- 子どもの貧困支援が重要と考える。空腹は非行の元になると思うし、勉強もできない。高校までは制服・体操服・教科書などの必ず全員が購入しなければならないものは、支援が必要と感じる。
- 教育格差の是正、無償・低額で学べる場・機会を増やす。基本的に教育には費用がかかるが、スタートラインから差が出てしまっているところもある。お金がないから勉強ができない、機会が得られないということがないように、整備する必要がある。
- 絵具や書道道具、裁縫セット、ピアノなどの楽器、制服やランドセル、体育着など高価だけれども一時しか使わないもの、サイズアウトしてしまうものは SDGS の観点からも「個人購入の見直し」や「リサイクル率を上げる取り組み」を市として積極的に進めてほしい。

## ③家事・育児支援、生活支援等の充実

子どもの登園・登校支援や産後のサポートなど、家事・育児や生活を支援するサービス等の充実が求められています。

- 家事育児支援の充実と拡充(ひとり親家庭への子どもの見守りや家事、保育園の送迎、病院の通院などの支援 など)が有効。
- ヘルパーなどの資源も少ないため、移動に対する課題を感じる。例えば、不登校の場合や病院に連れていく場合など、送迎サービスがあるとよい。
- 産後のサポートサービスの充実(家事援助・母のリフレッシュサポート)。
- 産前産後の育児支援として、ピンポイントに手伝いを頼みたいときに頼める先がない、という話も聞く。
- 安心して働ける環境を作る。(仕事探し、子どもの見守りなど、学童への手続きの手伝いなど)

#### ④子どもの障害に関する支援の充実

子どもに障害がある場合の支援の充実が求められています。保護者が休憩・息抜きできるようにするための支援の充実や、学校における専門的な対応の充実、障害がある子どもと同居するきょうだいに対する支援等が重要です。

- 介護サービスの提供(在宅向けの介護サービスの無償化)も有効。子どもに障がいがあり、24時間管が子どもに繋がっている状態で在宅介護をしている場合などにおいて、息抜きできるサービスあるといい。
- 専門性の高い質問に応えられる先生が少ない。特に特別支援教育。小学校の先生でも免許も持っているからと言って必ずしも特別支援の勉強をしてきている人たちばかりではないので、困り感が分からない。
- 保護者の方が課題を抱えがちになってしまうので、ショートステイなどの支援も重要である。
- 障害がある子どもと同居するきょうだいの方が、自己肯定感が低くなり、我慢してしまっているところがあると思う。例えば「きょうだいの会」等の自助グループに参加することで、いろいろな話をしたり一緒に遊んだりすることも重要だと思う。
- インクルーシブ教育も検討いただきたい。医療的ケア児が普通の学校と一緒に過ごす機会を作っていただきたい。そうすることで障害を持っている方達にもっとやさしい社会になっていくのではないかなと思う。
- 放課後等デイサービスの需要が増しているがどこの事業所も空きがない。放課後等デイサービス事業所の増設が重要である。

#### ⑤質の高い教育・保育の提供

教員・保育士の待遇の改善や配置人数の充実などにより、質の高い教育・保育を提供することが求められています。

- 保育所の配置基準を見直し、質の高い保育が大事。人手不足が課題。保育士の待遇改善を主力でやるべき。
- 1クラスの人数を少なくする。あるいは担任の先生と補佐の先生を必須にする。
- 保育園・幼稚園・小学校の教育に力を入れてほしい。幼児期から初等教育はとても大事だと思う。その時期に十分な教育ができるよう教員を多く配置し、保護者の対応(クレームも含め)は管理者やその担当者が対応する仕組みを作るとよいのではないかな。
- 保育園の充実、小中学校における教育内容の充実。子どもの意見を積極的に取り入れる市のモデルに府中市がなれば、子どもがたくさん集まる府中市になるのでは。

## ⑥子どもの居場所の充実

様々な形で、子どもの居場所づくりの充実が求められています。特に中高生が過ごせる場所の充実が必要とされています。

- 小学校に進学してからの支援について児童館の整備などに力を入れるべきだと思う。文化センターに児童館はあるが、17時で閉まることに加えて中高生は使いづらいので、多様性社会に沿った児童館ができるといい。
- 青少年の居場所作り。不登校や、学校に行けてはいるが居場所的なことで困っている子、様々なケースがいる。今の府中には居場所がなかなか無い。いつでも来てもいいとか、食事が出たりとか、そこで中高生の学習をちょっと見たりとか。そういった居場所があるとよい。
- サードプレイスが市内に複数あることが重要と考える。ひとくちにサードプレイスといっても、それぞれに様々な性格を持った場があり、ひとりひとりの子に合った居場所が必要である。
- 中高生の居場所づくり。小学生の居場所は地域に比較的あると思うが、18時以降の居場所やフリースペースがもっとあってもよいと考える。
- 日本人だけでなく、外国ルーツをもつ中高生も集まれる居場所支援。現在、外国の方が集まれる場所は少ない。学習する場所としての居場所も必要だが、ロールモデルとなる先輩とである機会を作る必要がある。

## ⑦子どもに対する様々な体験・経験の充実

地域での活動参加など、子どもが多様な経験をする機会や、地域の大人などと接する機会が充実することが重要と考えられています。文化的な経験が乏しくなっている子どもに対して、機会をつくっていく取組も求められています。

- 自分が役に立っている、認められていると感じる時間をつくる。地域活動の活用を検討する。地域の活動に参加することで、年齢層が上の方、スタッフからありがとうと言ってもらったり、助かったと言ってもらうことで、参加した子たちの自信に繋がる。
- 若者が参画できる機会や若者が活躍できる機会を増やすこと。現状、市民活動センタープラッツにおける「府中若者ミライ会議」などがそれにあたると思われるが、そこで出た案を若者と一緒に実現していくプロセスなどもあって良いと思う。
- 子どもたちが健康的な大人や、ちょっと上の世代のお人さんお姉さんに関われるような場があるとよいと思う。ただ場所があればよいだけでなく、来てもらうための仕掛けも必要で、そのための仕組みを考えていく必要がある。
- 職業体験、多世代交流。子どもたちのいろんな発想力は、いろんな経験を通じて生まれてくるものだと思うので、学校教育機関だけではなくて、地域の中でも職場体験などの多様な機会がもっと増えることが重要と考える。

- 経験不足を補える活動が必要。家庭環境や不登校状態によって、文化的な経験をほとんどできずにいる。費用負担の軽減ができるのであれば、例えば一緒に映画を観る、公園にピクニックに行く、音楽会に行く、動物園に行くなどの取り組みも重要と考える。

## ⑧子育て体験等の機会等の充実

子どもに対して、子育てのことなど将来に向けての体験・経験や教育機会の充実が重要と考えられています。

- 学校現場で、赤ちゃんに触れる体験ができるようにすることや、子どもたちの意見を聞く場をつくるなどの取り組みもあってもよいと思う。
- 次世代の子どもたちへの心の授業をして、子育ての魅力を伝える。子育て世代の親子に協力依頼をして、市内の中学校に出向き赤ちゃんに触れる機会をもち子育てに興味をもてるような取り組みをする。
- 子どもに対する性教育が重要と考える。特に妊娠出産は男女ともに適齢期があることを教育する。子どもが将来の夢を思い描けるような教育。職業体験や仕事についての学び。安心して教育を受けられるような環境づくり。男女ともに仕事に就けるような教育。
- 若者に対してお金に関する教育、マネープランに関する知識を得られるような機会を作ることも有効だと思う。
- 子育ての楽しさを伝えていくこと。若者世代は、子どもを持つことへの楽しみより負担の大きさを感じているようだ。地域や子育て機関で楽しさ、人とのつながりを伝えていく。

## ⑨子どもからの意見聴取の方法について

子どもから意見を聴取する方法は様々あると考えられます。一つの方法として、子どもが普段過ごす居場所において信頼できる大人が聞き取りを行うということが重要と考えられます。

- 例えば、声をあげられない児童や若者のいる場所に職員が出向いていき声を聞いたり、彼らが信頼できる大人を交えて安心できる場所を提供する。
- 話を聞く場をたくさんつくる。X(旧 Twitter)や Instagram の活用。使いやすいツール、入りやすい工夫をする。おしゃべりの時間をつくる。急に、悩みある？と聞かれて話す子はいない。ダーツやトランプ、かるたをしながらだと、話しやすいと思う。
- 対面で聞くより、小学校でも中学校でもモバイル PC が配られているので、普段手を挙げない子でも自分の意見を書き込みやすい。タブレットを渡して書き込んでもらう、という方が聞けるのかもしれない。
- ふだん過ごせる居場所の確保。学校とは違う形で、地域の中に居場所があることで、そこで言えること・漏らせることもあるのではないと思う。

- 学校との連携で、子どもたちの意見を聞くアンケートを実施したり、府中の課題等に対する探究学習の授業などを実施したりすることも有効だと思われる。
- 学習支援(寺子屋)、学童クラブ、学習支援教室、児童養護施設、子ども食堂などに、足を運び、意見を聞く。(お茶菓子を持参して伺うなどし、意見を聞く姿勢を示し、心を開いてもらってから意見を聞く)
- なかなか外に出たり、自分の意見を話したりということが保護者子どもともに難しいので、信頼関係のある支援者が訪問時に丁寧に聞き取りをするなどではできるかもしれない。

### ⑩更なる連携等の充実、切れ目のない支援の充実

支援の充実には、関係機関等の中でさらに連携を深めていくことなどが重要です。切れ目のない支援を行っていくためにも、地域でのネットワーク作りを進めていく必要があります。

- 地域のネットワーク作りが課題である。いろいろな所に足を運んで、顔の見える関係を築いてきたい。
- 重層的支援ができるような仕組み体制作り。ケース会議をした時に、それぞれの分野からの話は出るが世帯全体を考えた支援策というところまでは行き着かない。
- 負の連鎖を断ち切るための支援あり方を考えなければならない。例えば支援が 18 歳で切れてしまうこと、義務教育後の段階での支援が少ないことなど、課題になる。地域のネットワーク作りが課題である。
- 複雑な案件の家庭のケースで、複数の機関が連携していたが、解決せず、連携するだけでは難しいというケースもあった。責任の所在が不透明になった。

### ⑪支援・介入の難しさについて

課題等に気づいても、支援・介入を行っていくことが難しいことがあることが課題となっています。連携機関の間での情報共有のあり方などを検討していく必要があります。

- 生活援護課につなぐ前段階が一番難しい。書類申請へのハードルが高い。保護者は書類を書くことが苦手だったり、一人で市役所に行けなかったりする。本人に困り感がないと手続きまでは行かないという歯がゆいところがある。
- フードパントリーの活動の中で課題があると思われる家庭に気づくこともあるが、課題の解決まで持っていくことが難しいということがある。
- 個人情報の壁があり、連携・情報共有が難しいこともある。
- 養護者支援が必要なケースがあるにもかかわらず、対応にあたっては養護者の同意が必要なことも課題になる。
- 発達に課題がある子は、学校や関係機関もアセスメントのために、病院の主治医の見立て診察の様子が知りたいが、精神科(児童精神科)は要保護対策協議会で協議するケースであっても、保護者の承諾がないと共有してもらえないということがあった。

---

発行：府中市子ども家庭部子育て応援課  
〒183-8703 東京都府中市宮西町2丁目24番地  
TEL 042-335-4192（直通）

集計・分析：株式会社 浜銀総合研究所  
〒220-8616 横浜市西区みなとみらい3丁目1番地の1  
横浜銀行本店ビル  
TEL 045-225-2372

---